

特218

66

書叢活生代現

輯二十第

動運生優

著儀林田池



部版出會育教國帝



始



特218
66



現代生活叢書
第二十輯

優 生 運 動

池田 林儀 著



帝國教育會出版部



第 二 十 二 卷
主 要 論

新 日 本 報 社



は し が き

よい草花を作るには、

よい 種子 と

よい 畑 と

よい 手入れ

とが必要である。この三拍子がそろはなければ、決して、よい草花は出来ない。草花の改良にはこの三つのものゝ選擇改良を必要とする。

これと同じことで、……………

よい人間を育て上げるには、

よい 親 と

よい 社會 と

よい 教育

とが必要である。父母は種子であり、社会は畑であり、教育は手入れである。この三拍子が揃はなければ、決して、よい人間は出来上らない。人間の改良には、この三つのもの、選擇改良を必要とする。

けれども、……………

草花にもいろ／＼ある。ばらもあれば、ゆりもあり、ぼたんもあれば、しやくやくもある。種類は別であつても、草花なるに變りはない。草花を改良するといつても、みな一律に同じ方法でやるわけにはゆかぬ。ばらには、ばらの特質があり、ぼたんにはぼたんの特質がある。その特質に従つて、それに適當する改良の方法を講じなければならぬ。

人間にもいろ／＼ある。日本人もあれば、支那人もあり、イギリス人もあれば、ロシア人もある。ひとしくみな人間であることに變りはないが、その性質、性格、傳統、習慣、環境において、みなそれ／＼の性質を持つてゐる。人間の改良にあたりても、萬民一律の方法によるわけにはゆかぬ。日本人の改良には、日本人特有の改良方法を講じなければならぬ。優生運動といふのは、この人間改良の運動である。

古來、いろ／＼な方面から、いろ／＼な人がこの人間の改良を企てた。宗教の力を以つて教育の力を以つて、醫學の力を以つて、それをなさうと努力した。努力しつゝある。

けれども、いづれも、その豫期したやうな十分なる目的を達することが出来なかつたし、又出来ない有様である。何百年來、依然として同じ努力の繰返しであり、勞ばかり多くして效果の少ない有様である。根底から改良されたといふやうな傾向は毫末も見出す事が出来ないものである。

何故か？ ……………それにはいろ／＼な理由もあらうが、次に述べる「遺傳の力」を無視したといふことも、その最大の原因の一つである。

大體、人間には、否人間ばかりではなく、凡そ生きとし生けるものには總て遺傳といふ極めて靈妙偉大なる力が働いて居つて、この不可思議なる法則に支配されてゐる以上は、如何なる良い教育、如何なる良い社會を以てしても、その惡質を矯正し打克つことの出来ない場合がある。これが國民の身體及健康の上に及ぼしてゐる力は、決して輕視することの出来ないものである。であるから、國民の健康は、ひとり體育とか榮養とかいふ後天的な方法だけ

ではこれを期する事が出来ないのである。

その代り、遺傳の力は、良い方面にかけても、亦絶對的に強いのである。近年、草花や家畜や果樹などにいろ／＼と人工的に改良を加へて、驚くべき立派な果實を結ばせたり、珍奇な美しい花を咲かせたり、全く驚嘆すべき進歩を見せて居るが、これ等は皆この遺傳の力を巧みに應用したものに外ならない。であるから、人間の改良にも、この遺傳の力を旨く利用するやうにすれば、案外容易に、無駄骨折らずに改良が出来るのである。しかし、又、反對に、もしもこれに逆らつて無謀な無考へた眞似をすれば、その一家一門は言ふに及ばず、延いてはその民族全體をも滅亡に導くといふ恐しい結果になるやも測られぬのである。事實われ／＼は、さういふ例を見聞させられてゐるで、遺傳の力は、善い方にかけても、悪い方にかけても、人間の改良發達には見落すことの出来ない重要な事柄なのである。

優生運動は、つまり、この遺傳の力を旨く利用して、人種の改良を圖る運動なのである。が、單に遺傳の力にのみ據るのではない。遺傳の力——言はゞ生物學を基礎として、これに社會學を加味して成立つてゐるのが即ち優生學なのであつて、これを實際に應用實行するの

を、優生運動と稱ぶのである。

しかし、優生運動を、單なる人種改良の運動であると思つては不可ない。それは讀み進むに従つて解るであらうが、人種の改良を圖ると共に、併せてこれを基調として、社會の改善を計り、國家の繁榮幸福を期さうといふ大なる社會改良運動なのである。優生運動の眞の眼目はそこにあるのである。これを大局から見れば、實に世界改造の大運動であると言つてもよいのである。

昭和四年櫻の頃

ドイツ旅行中 著者識

目次

- 一、如何なる名匠名工でも……………一
- 二、氏が育ちか……………一〇
- 三、雙生児について……………二七
- 四、劣弱者の保護さるる社會……………二六
- 五、理想的な結婚……………三六
- 六、天才よりも普通の人……………四六

——以上——

小傳

池田林儀先生は、遠く鳥海山のほとり秋田縣由利郡小出村の産にして、本年三十八歳の働きざかりである。本莊中學を優等に卒業してから、やがて、東京外國語學校シヤム語科に學び、めでたく業を卒へた後、大日本雄辯會講談社の創設に努め、次いで故大隈侯主宰雜誌「大觀」の編輯長となられた。

たしか、大正八年かに報知新聞の記者となり、翌九年ドイツに遊學し、ベルリン大學に「優生學」を修めて哲學博士をおくられ、更に、ロスタツト大學に「女性史」を專攻して、ここでも亦哲學博士の名譽を受けた。二つの學位を土産として、大正十三年歸朝し、やがて報知新聞學藝部長の椅子を占めらる。同十五年十一月いたく感ずるところありて「優生運動協會」を創めて、月刊雜誌「優生運動」を發行し、終生の事業として國の内外に普及宣傳しつづあり。

先生、夙に、雄辯達辯を以て鳴る。加之、椽大の筆よく千軍萬馬を挫くの概もある。その

著すところ一にして足らねど、試みにその五六を擧ぐれば、

- ▽東西女性發達史……………(寶文館)
 - ▽應用優生學と妊娠調節……………(春陽堂)
 - ▽通俗應用優生學講話……………(富山房)
 - ▽文明の崩壞……………(寶文館)
 - ▽改造のドイツより……………(東京堂)
 - ▽ワンダーフォーゲル……………(文化堂)
 - ▽永遠の貧乏……………(文友社)
- 等、頗る好評を博してゐる。

優生運動の話

池田 林 儀 著

一 如何な名匠名工ても

明治維新以來、我國の文明の進歩は洵に目ざましいものであるが、中でも殊に長足の進歩を遂げて世界を驚かしてゐるものは、醫學であらう。實際、明治大正の六十年間に亘る我が醫學の進歩發達は、まことに著しいものであつて、今日では世界有數の醫學國の一となつてゐる。醫學校の増設、醫學博士の輩出、藥學の發達など全く端倪すべからざるものであり、事實また質に於いても、野口英世博士などを初め、多くの世界的大學者をも出すに到り、決して歐米の先進國の醫學に比して羞づべきことはないのである。

一方また、醫學の進歩に伴つて社會の衛生思想や衛生設備もなかく進んで来て、六十年前と今日とは大分面目を異にしてゐる。國際聯盟の公衆衛生國際事務局の委員が、詳しく日本を視察して發表した報告書を見ても、くすぐつたいほど我國の衛生設備その他の完備を褒め立ててゐる。日本醫學界のこの隆昌は、お互同胞と共に慶賀して然るべきことである。日本の醫學は實際長足の進歩をした。しかし、その進歩の跡を飾る六十年の史跡を顧みる時に、その間に日本國民の間から、どれだけの病人が減少してゐるか。醫學の進歩によつて疾病がどれほど抑えつけられてゐるか。醫學博士の數は雨後の筍のやうにどん／＼殖えて行く。この頃では、一日に一人半の割合で醫學博士がふえてさへゐる。だが、それと同時に病人もまた轉をならべて殖えて行くといふ事實がある。病院はどれもこれも大繁昌である。醫者の食ひはぐれはないとさへ言はれてゐる。だから、醫學の進歩に伴ふ疾病の進歩發達もまた見のがすことの出来ない重大問題である。全く、をかした話である。醫學が進歩しても疾病がこの世から少しも減じないといふのは、どうも理屈に合はない話である。それは何故だらうか。ある人は、疾病の驅除の出来ないといふのは、醫學者の恥づべきことであると言つ

て、醫者や醫學者を責める者もある。果してこれは醫者や醫學者の罪であらうか。こゝが一つの考へ問題である。

醫學と言つても、色々な方面がある。既に現はれた疾病の徴候を診察して、これに對する療法を施すのもその一つである。これは丁度、障子が破れたから、切り張りをせよと騒ぎ、床がゆがんだから大工を呼べと言つた調子のもので、俗にこれを修繕醫學と呼んでゐる者がある。修繕醫學にも、既に病氣になつたものばかりを修繕せずに、さてこれから病氣になりさうだなど思はるるものを豫知して、未だ發せないうちに、豫病策を講ずるといふ方法もある。即ち、疾病の因つて以て來るところを察知して、これを未然に防ぎ、進んでは身體全般の抵抗力を増進して、その禍を少なくしやうといふのである。これは餘程進んだやり方であるが、理論としては高唱されながら、實際にはあまり活用されてゐないやうである。それはそれとして、病氣になつてから泥繩的に手を下すといふのは、醫者として良醫といふわけには行かない。けれども醫者は常に民衆の側に付き切つてゐるわけに行かないから、同胞全體の身體を保護して疾病を未然に防ぐなどといふことは、口では言ふべくして實際には行はれ

ないことである。疾病を未然に防ぐには、民衆各自の衛生思想の發達によつて自己の注意心がけを以てこれをなさなければならぬ。

修繕醫學のほかに、もう一つの方面がある。誰であつたか、昔の人が「醫は醫なきを期すべし」と言つたことがある。醫者の本務は、この世から疾病といふものをなくして、醫者の必要をないやうにすることであるといふのである。それには、病人をつかまへて来て、薬を飲ませたり、手術をしたりする修繕的方法手段ばかりやつてをたつたのではない。よろしく社會民衆の衛生方法を確立し、設備を完備し、保健の堅壘を築き上げなければならぬ。大丈夫將に天下國家を醫すべし、といつて匙を捨てて廟堂に走つたといふ痛快な醫者も昔あつたといふことであるが、これなども修繕醫學を脱却して民衆に投じていつたものといふべきであらう。こういふ方面の醫學を、修繕醫學に對して、社會醫學といふのである。社會醫學にも、修繕醫學と同様に、消極的方面と積極的方面とがある。乃ち既に現はれたる疾病を治すことと、未だ現はれないものを未然に豫防することとが、それである。と言へば、誰でも直ちに、傳染病のやうなものが流行し出したら、これを隔離したりするのが消極的方面で

豫防注射をしたり何かしたりするのが積極的方面で、こういふ風なことを言ふのだなと考へるに違ひない。それはその通りである。しかし、そうした卑近なことよりも、もつと我々に深い、しかも近い關係を持つものであつて、社會醫學に俟たなければならぬ多くの事柄がある。

大正十四年東京において開かれた熱帯病醫學會に際して、アメリカのロツクフェラー研究所のハイザー博士が「日本は法律を改正してでも、白米を食はせることを止めなければならぬ」と言ひ出したのである。それは、日本人がその常食たる白米を採ることによつて、國民に共通な白米病に犯されてゐるから、これを防止して健全なる身體を作れといふ忠言なのである。白米病と言へば、脚氣かと思ふであらうが、脚氣も白米病の一種に相違ないが、決してその全體ではない。白米病は白米が缺いてゐるところのビタミンBの缺乏に原因してゐるのであつて、婦人の便秘が多いこと、その他婦人の多くのらくら病は大抵この白米病に犯されてゐるからである。日本人が汽車や電車に乗つて、居眠りの多いこと、脚のだるいこと、身體の倦怠の多いことなど、殆んどすべてこのビタミンBの缺乏に原因せざるはないのであ

る。このビタミンBの補充が十分についたら、お互の身體具合は大分違ふであらう。ハイザ博士の忠言は、まことに突飛ではあるが、その中心の好意は有難く受け容れて、玄米は食はぬまでもビタミンBの補充をなす方法を講ずべきことは、現下日本人の急務である。これなども、たしかに社會醫學の重大なる任務の一つである。それならばビタミンBをどうして補充するか。それは至極簡単なことである。糠を利用することである。野菜を多く食ふことである。糠を米と一緒に炊き込んでよい。味も色も決して變らない方法がある。しかし此の事は他の機會において詳述することにする。兎に角、社會醫學の取扱ふ問題はこの外にも多くあつて、今一々その例を擧げる邊はないが、とにかく日本における修繕醫學は前にも言つた通りその進歩が著しいにかゝはらず、この社會醫學の方面の進歩はまことに遅々たるものである。それで、これからは、この方面の進歩發達に向つて、日本は大いに努力せねばならぬところである。

日本の病人が年々多くなる一方で、少しも減じないのは、斯様に社會醫學の缺陷にも因るであらう。勿論それもあるであらうが、しかし、それよりもつと重大な原因が他に在るの

である。病人が減らず、疾病が抑えられないのは、醫者の故でも醫學者の罪でもなければ、また社會醫學の不振の故ばかりではないのである。その根本は、人間に在るのである。個々の人間の體質に在るのである。病氣に罹り易いやうな人間が多く生れて來るからである。

こゝに今、一軒の家を建てるとする。柱や梁や屋根などの骨組は、木材で組立てる。周圍を圍ふには竹と藁繩とを編んで、それに泥の壁を塗りつける。屋内を飾るには紙の障子を立て、紙の襖を立てる。かくして、ともかく一軒の住宅が出來上る。ところが、いざそれに這入つて住む段になると、忽ちにして障子は破れ、襖は裂け、早くも切り張りしたり、手入れをしたりせねばならなくなる。少し強い雨風が吹くと壁は落ち、屋根は漏つて來る。グツラ／＼と一遍強い地震に襲はれると、もう土臺は撓ぢ曲り檐は傾いて、突つ張り棒をせねばならなくなる。それも初めのうちはいゝ。どうにか膏藥張りの修繕でも間に合はされるが、年と共にますます弱つて行く。そして遂には、折角家を建てるために借りた借金をまだ済して了はないうちに、まだ幾年も住まはないうちに、どうにも修繕のつかないほど朽ち毀れて了ふ。如何なる名工の手にかけても、どうにもならなくなる。何故こんなことになるのか。大

工が悪いのか。それとも風や雨が悪いのか。それは、材料が悪いのである。紙だから障子襖は破れ、泥土だから壁は風雨に害はれ、木骨だから地震にわけもなく崩されるのである。これを鐵骨鐵筋のコンクリートの建物に置換へて見る。障子の代りにガラス戸、泥壁の代りにコンクリート、木骨の代りに鐵骨といふ風に見れば、少し位の暴風雨や地震などに遭つても、容易に破損することはない。勿論ガラスなどは破られることもあるが、しかしそんな小局部の破損は問題ではない。木造家屋のやうに頻繁に修繕をしなくてもよいし、第一長持ちがする。同じ家屋でも、同じ建物でも、これほどの相違があるのである。

人間の世の中も丁度それと同じである。社會は一つの大きな建物である。人間はその建物の筋骨であり、壁であり、戸窓である。よき社會、よき國家を作るには、まづ以てその根本であるところの人間から改良するやうにかゝらねばならない。病氣に罹らぬやうな健全なる人間から先につくらなければならぬ。病人を少なくし、弱い人間を少なくするやうにせねばならない。しかし、それでも人間は全然疾病を撲滅せしめることは出来ないから、絶體に病氣に罹らぬといふことは出来ない。やはりそれに犯される處はある。だからその爲にま

づ社會醫學を講じて、尙それでも病人が出たら、その時こそ修繕醫學を利用するのである。斯ういふ風に、まづ人間の體質からして丈夫にして置いて、その上で社會醫學と修繕醫學とを適宜に活用すれば、その時こそ初めて醫學の効果が現はれるのである。こうするより外に醫學の成績をあげる道はないのであつて、いくら醫者を責め醫學者を糺してもそれは無理である。弱々しい毀れ易い木造の家屋をまかさされたのでは、如何なる上手な大工と雖も、それを何時までも新鮮に丈夫に持ち續かせることは出来ないのである。生れつきの弱い、病質な人間を相手としては、如何なる名醫でも絶體に病氣に罹らせないやうにするなどは到底出来得ないことなのである。

であるから、まづ第一に健全なる人間を生むやうにし、次に社會醫學の普及發達の法を講じ、最後に修繕醫學を利用するやうにすれば、初めて醫學の効果があがり、醫者の功德が發揮されるのである。この三段の経過によりて、よい人間をつくり、而してこの基礎の上に立つて、よい社會を作つて行かうといふのが優生運動の目的なのである。

二氏か育ちか

醫學は人間にとつて、前述のやうに重要ではあるが、しかし醫學ばかりではよい人間をつくりあげることが出来ない。

よい草花を作るには、

よい種子と

よい畑と

よい手入れ

とが必要である。この三拍子がそろはなければ、決してよい草花は出来ない。草花の改良には、この三つのものの選擇改良を必要とする。

これと同じやうに、

よい人間を育てあげるには、

よい親と

教育は手入れである。この三拍子がそろはなければ、決してよい人間は出来上らない。人間の改良には、この三つのものの選擇改良を必要とする。

が、草花にもいろいろある。バラもあれば、ユリもあり、ポタンもあれば、シヤクヤクもある。種類は別であつても、草花なるに變りはない。草花を改良するといつても、みな一律に同じ方法でやるわけにはゆかない。バラにはバラの特質があり、ポタンにはポタンの特質がある。その特質に従つて、それに適當する改良の方法を講じなければならぬ。

と同じやうに、人間にもいろいろある。日本人もあれば、支那人もあり、イギリス人もあれば、ロシア人もある。ひとしくみな人間であることに變りはないが、その性質、性格、傳

統、習慣、環境において、みなそれぞれの特質を持つてゐる。人間の改良にあつても、萬一律の方法によるわけにはゆかぬ。日本人の改良には、日本人特有の改良方法を講じなければならぬ。

優生運動といふのは、一口に言へば、つまりこの人間改良の運動である。日本には、日本特有の優生運動が發達しなければならない。では、優生運動といふのは、どんなことをするのかと言へば、つまるところ「よい親」「よい社會」「よい教育」といふ、この三拍子をそろへることに努力することである。そして、これによつて、社會を構成してゐる人間各自の素質をよりよくして、人類文化の向上發展を期するのである。

世間には、いろいろな社會運動がある。労働運動、婦人運動、政治運動、宗教運動、禁酒運動、等々、一々枚舉に遑がないほど多種多様な運動がある。共に社會をより善くし、國家もより幸福にしやうといふ目的には變りはない。しかし、優生運動は、これ等のすべての社會運動の根本を成す運動なのである。婦人運動にしろ、労働運動にしろ、政治運動にしろ、まづその根本をなすところの人間から改良してかゝらなければ駄目である。所期の目的を充

分に達することは到底出來ない。これまでも、宗教を以て社會改良を圖つたものはあつた。教育を以てそれを企てたものもあつた。その外いろいろな方面から社會改良を圖つたものはあつたけれども、何れも十分に目的を達することが出來なかつた。それには色々な理由があるが、その最大なる原因は、この社會の根本を構成するところの、人間の改良をすることに氣付かないか、或は氣付いてもその方法が誤つてゐた爲である。木材が腐朽するものであり、壁土が風雨に解破するものであることに氣付かないで、永久に堪える木造家屋を造らうとして苦惱するのと同じである。政治運動でも、労働運動でも、婦人運動でも、まづ以てよき人間を作つてからかゝらなければ、穴のある袋に米を満たさうとするのと同じ無駄な餘計な努力を費さなければならぬ。

これまでも人間の改良を企てたものはあつた。宗教家とか教育家とかである。けれども、宗教家や教育家やその他の社會改良家の多くは、人種改良の道は人間の環境を改善することであると信じてゐたのである。現に信じてゐる者も多くあるのである。即ち、人間に適當なる温度と、滋養と教育とを與へさへすれば、各個人の先天的の性質をも變改して、立派な人

間となすことが出来ると信じてゐるのである。そればかりでなく、更にその一旦改善したる性質は、即ち改良の結果なるものは、次代から現代へと遺傳して、斯くして人類は時代毎に進化し、だんくんに完全に近づいて行くものであると考へてゐるのである。この考へをよく検討し解剖して見ると、これには、(一)環境の變化は人の先天性を變化するといふことと、(二)その變化(後天性)は次代に遺傳するものであるといふことの二つの假定條件が含まれてゐるのである。ところが、人間には、否人間ばかりでなく總ゆる生物がさうであるのだ。教育だとか宗教だとか、さうした後天的な力によつては如何ともする事の出来ない嚴密なる力が働いてゐるのである。それは、遺傳の法則である。一度この遺傳の法則に支配された以上は宗教の力でも、教育の力でも、醫學の力でも、如何なる方法によつても拒み得ない精密にして嚴格なる作用を受けるのである。

人間にとつて環境の重大なることは誰でも知つてゐることであり、近來殊にやかましく論ぜられるやうになつた問題である。環境の力の偉大なることは、往々その人間の天性をも變化せしめるやうに思はれることがある。これまで宗教や教育によつて人間の改良を企てて來

た人たちは殆どこれを絶體的に信じてゐたのであり、現に未だにそれを信じてゐる者が随分多いのである。シエクスピアは「生みか育ちか」と言つたが、實際この「生みか育ちか」は人間にとつて長い間の疑問であつたのである。しかし、今日では、人の諸性質は「生み」によつて決定されるといふことが明らかになつて來たのである。即ち、遺傳が人の性質を決定するのである。そして、天性を變化しやうとする環境の力なるものは、必然的にこの遺傳によりて、制約されるものであることが、わかつたのである。環境は遺傳の力をどうすることも出来ない、つまり環境は人間の先天性をば變化せしめることが出来ないといふことが判明したのである。

しかし、それだからと言つて環境が輕視されてもよいといふのではない。やはり環境は人間にとつて重要なものであることは少しも變りがないのである。實際、人類の發達に對して遺傳と環境との二者の中、いづれが一番大切であるかといふことになれば、それは一朝にしては解決し得ないまことに重大な問題である。遺傳ばかりを見つめてゐると、遺傳が第一であつて環境などは何でもないかの如く思はれるが、しかし前にも言つたやうに、よき人間を

作るには、よき父母即ちよき遺傳と、よき社會即ちよき環境と、教育即ちよき訓練とが必要なのである。そのいづれの一をも缺くことは出来ないのである。

遺傳と環境とが、いづれが人間性質に貢獻するところ多きかと争ふのは無意味である。しかし、一つの特質の差異が、遺傳と環境といづれの差異に基くところ多きかを考究することは必ずしも無意味だとは言へない。その差異は、遺傳によることもめり、環境によることもある。ある個人の特質を一見して、それが遺傳によるものであるか、環境によるものであるかを識別することはむづかしいことである。とにかく、遺傳と環境とが、いづれがその及ぼす感化影響が大であるかといふことを知ることは、興味ある問題であり、一應知つて置かねばならぬ事である。意を改めて、その遺傳と環境とが及ぼす感化の優劣を、雙生児の例によつて示して見やう。

雙生児の例を擧げる前に、かういふことを一言しておくことが便利である。それは——環境が人間の天性を變化する力には制限がある。また環境は人間の持つて生れた天性に發達の機會を與へるものである。しかし、環境が與へる變化も、發達も、ともにその最極限度があ

つて、それ以上には變化せしめることも發達せしめることも出来ない。——といふことで、これによつて見ると、遺傳は最後の決定者であるかのやうに思はれる。

三 雙生児について

雙生児には二様の種類がある。その一つは普通雙生児と言ひ、他の一つは同體雙生児と言ふのである。普通雙生児といふのは、二つ又はそれ以上の卵子が同時に受精した結果として普通ならば兄弟姉妹といふ風に順々に生れ出て来るべきものを、一度に生れ出たといふに過ぎないもので、事實上兄弟姉妹なのである。であるから、その性も異なつてゐる場合が多くその容貌その他も相似ないことが多い。

同體雙生児といふのは、二個またはそれ以上の發芽點を持つてゐる卵細胞が分離して、獨立の個體に發育したものである。これが出来そこなふと、奇怪な雙生児が生れ出て来るのである。同體雙生児は多くの場合同性であつて、その容貌その他も酷似し、時々全く差別がつかないやうな場合が多い。また不思議なことには、同じ日に同じやうな事情から乳齒が脱け

たり、また、相異なる土地に離れ住んでゐながら、同じ日に同じやうな病氣にかゝることも珍らしくない。

遺傳と環境とが及ぼす感化の優劣を知ることが、及び、後天性が遺傳するものであるか否かを究めることは、社會改良家にとりても、人間改良家にとりても、極めて重大なことであつて、この研究は當然正確に成し遂げられなければならない問題である。優生學の創唱者フランチス、ゴールトンは、この問題を解決するために、その研究材料として、この双生兒に目をつけたのである。ゴールトンは、まづ第一にかういふ點に着眼した。若し、環境が天性を變化し得るものであるならば、一生殖細胞の分離によつて生じた同體双生兒も、環境を異にし、生活様式を異にすれば兩者の間に差異を生ずべき筈であるといふことがそれである。また、これに反して、二個の異なる細胞より發達したいはゆる普通双生兒も、同一の家族に同一の食物を以て養はれ、同一の友人と交はり、同一の教育を受くる時は、兩者間の差異も消滅すべき筈である。若し、上述の場合において、同一双生兒が常に相類似し、普通双生兒が依然として同じ差異を繼續するやうであれば、環境が個人の天性即ち遺傳も變化し得ない

ことになるわけである。さう考へてゴールトンは、八十組の同一双生兒について實際の研究を試みたのである。その研究の結果を、彼自ら記述してゐるところによつて摘録して見る。

幼年時代においては、彼等は常に頸や手首にリボンを巻きつけて判別されてゐたが、時々他の一方を誤認して、食物や醫藥等を給せられ、また、他の一方の犯した過ちのために、罪のない一方が打たれることもあつた。またある時は、一方ばかりが二度も湯に入れられて、他の一方が忘れられるといふ場合もあつた。ある畫家は、三四歳の同一双生兒を寫生を試みたが、ある事情から中止して、二三週間の後に再びそれを繼續しやうとした時は、雙生兒のうちでどれがそのモデルであつたかを識別することが出来なかつた。

家庭醫師が雙生兒の識別に困しむことは稀ではない。ある雙生兒は、他の一方が音樂教師の日課の練習を好まぬ場合、その犠牲となつて、二入分の練習をつとめるのを常とした。ある雙生兒は、舞踏會において發見せらるることなしに、何回となく舞踏の相手を変へたといふこともあつた。またあるいたづら好きの雙生兒があつて、常に苦情の種子をまいたが、その二人はいつもその實を語らなかつたために、友達の生徒たちは、その何れの一方がいたづ

らの主人公であるか判別に困つた。で、やむを得ないので、彼等は、校長先生が「罪のない方を打つてはいけない」と注意したにも拘らず、雙生兒の二人を鞭つのを常とした。

雙生兒が、鏡にうつつた自分の姿を見て、他の一方の雙生兒と思ひ違ひをして話かけたといふ話もあつた。

ゴールトンは、特に綿密に調査を遂げた三十五組の同體雙生兒のうち、七組は雙方とも特有の疾病にかゝつてゐた。またその九組は、傳染病にせよ、非傳染病にせよ、常に同時に發病する傾向を有してゐた。之らもまたゴールトンの述ぶるところによれば、彼等が取扱つた三十五組の實例のうちで、雙生兒の兩方ともにある特殊の不快のため、惱みまたはある例外の特徴を有してゐた場合は、僅に七件に過ぎなかつた。一對の雙生兒の場合には、姉も妹もひとしく梯子段を急に昇降することが出来ない缺點を持つてゐたが、これは生來ではなく、二十歳の時からであつた。また、三對の雙生兒は、その指に特徴があつた。その第一は小指關節には生來の屈曲があつた。これは兩親からでなく、父母からの遺傳であつた。しかし、兩親や他の兄弟姉妹には、何の變徵もなかつた。その第二の雙生兒には、指を曲げることに

奇癖があつた。母の方にやゝこれに類する特徴かと思へるべき傾向があつたが、親族中にこの奇癖を有するものは外には一人もなかつた。第三の場合は、ダーウインの擧ぐるところであつて、雙生兒は小指に變曲を有してゐたか、他の小家族中一人もこの特徴を持たなかつたのである。

尙また他の雙生兒の一方は、生來の脱腸であつたのに、他の一方も六ヶ月経過した後脱腸となり、二十三歳のときには兩人共に齒痛にかゝり、同じ齒を抜き取つた。この外、雙生兒の兩方ともに頭髮の脱け落ちたる奇談及び同一病氣にかゝりて死んだ二つの實例がある。その一は最も考察に値する事實である。この雙生兒は誰でも取違へぬものがないほど酷似し且つ、非常に睦まじく、兩人ともに政府の小使に任ぜられ、同一の家屋に住して居たが、その一方がブライト病にかゝつて死去せしに、六ヶ月後には他の一方も同一の病氣で死んだのである。

右のようなゴールトンの擧げた類似の著しきことの實例、及び、その後の實驗者の擧げた新資料による研究の結果は、同一遺傳または、遺傳經承の一般原則では、つひに説明の出來

ないほどに齊一である遺傳の特徴を持つてゐる雙生兒の存在を證明してゐる。相互間に存する性質及び心靈上の酷似は、彼等雙生兒を長く別居せしめ、全然異なつた環境に對面せしめた場合にもなほ持續するものである。そこで、ゴールトンは、

「肉體上、精神の類似は、生活様式の變化にかゝはらず、多くの場合終生持續する。もしその類似に變化を生ずることがあれば、それは重大なる疾病に起因するか、あるひは、幼年時代に潜在した天性が遅れて發達したかに因るものである。こゝにおいてか環境が天性を變化し得ないことは明白である。」

と言つてゐるのである。

次に普通雙生兒を同一の境遇においた場合はどうであるかに就いて見やう。

普通雙生兒間の差異は、同一家族中の他の各員に存するものに等しく、有形的特徴、智能及び氣質の點において、相互間に著しい差異が現はれるものである。假令雙生兒が養育される環境の事物が、ほとんど同一であつても、その幼時は顯著であつたところの差異は、少しも減減することは出来ない。ゴールトンは、これを二十組の雙生兒について考察したのであ

る。彼の取扱つた雙生兒は、その性質において著しい相違を示してゐたが、これを同一の境遇に置いたけれども、その差異は少しも除去されなかつた。その顯著なる二三の例を擧げて見ると、第一の雙生兒は、生れた時から、同一の食物を與へられ、共に健康にして且つ強壯であつたが、體質智能は言ふまでもなく、その感情の點にいたるまで、何のゆかりのない二少年に比して、少しも異なるところがなかつた。第二の雙生兒は、生れてから十三歳に到るまで、全然同一の境遇に育ち兩者とも極めて健康であり、同一の嫁姆によつて養育され、同一の學校に通ひ、十五歳になるまで全く離れることがなかつたが、その性質、習慣、趣味における彼等の差異は、現在にいたるまで繼續して來てゐるのであつた。第三の雙生兒は、生れて以來、全然相離れることはなかつた。食物も、衣服も、教育も、悉く同一であつた。彼等は生齒期を同じうし、また、同時に麻疹、百日咳にかゝつた。その他兩人とも極めて健康であつた。しかし、兩者の心的傾向は極端なる差異を示してゐた。この外にも多數の實例をゴールトンが擧げて、その結論は結局、環境の力は天性を變化し得ない、といふことに歸着したのであつた。

つまり言へば、同一程度の精神状態を有する人々が、その生活中に遭遇する環境の差異が突飛でなく、尋常一般である場合には、両親を同じくする小供間に普通見る以上の大なる人格の變化を人類中に生ずるものでないといふことになるのである。遺傳または環境が生み出す差異について、如何なる説が唱へられ得るとしても、

「教養の差異が、同一國民間及び同一社會階級の人士間に發見さるる程度を越えざる時には自然力は必ず教養を壓倒したるものである。」

といふゴールトンの言には、極めて深い論據があることを認めないわけには行かない。しかしてまた、

「人間各個人において多少の差異はあるとしても、しかも何人においても常住不斷なる一要素は、即ち自然傾向である。」

といふことも、否むことは出来ない。

我等は以上のゴールトン等の研究を通じて、「天性の力は境遇の力よりも強い」といふことを知り得た。しかし、そのことは我等に必要なことでも、價値のあることでもない。われ等

はそれよりも、天性の力と環境の力との正確なる強度を知りたいのである。その強度を知らうとして、色々の學者がいろ／＼な方法でこれを研究した。しかして、その研究による事實を基礎として、

「人間の諸性質を決定するものは、生殖細胞の性質、即ち遺傳であつて、天性を變化する環境の力は、必然遺傳の制約を受けるものである。」

といふ結論に到達した。そしてまた、その研究の結果は、われ等に、善良なる環境、時機及び教育は、優秀なる遺傳に發現の機會を與へるものである。しかし、それ等は、不良なる天性を變じて善良なる天性となすものではない。

といふことを、教へるのである。

斯う言ふと、こゝに一つの反對論者が現はれて來るに違ひない。

「偉人や天才は境遇の所産である。如何なる才能も善良なる環境と教育の恵みなしには發達し得ない。」

と抗議するのである。事實、マツキン・キャテル氏の如きも、

「ダーウインをして一八〇九年に支那に生れしめたならば、恐らく進化論者としてのダーウインは現はれなかつたであらう。また、アメリカ史上に彼の南北戦争が起らなかつたならば偉人リンコルンは出現しなかつたであらう。更に二者をして地を替へしめたならば、アメリカにダーウインなど、イギリスにリンコルンなどなかつたであらう。」

と言つてゐる。なるほど、これらは一面の眞理がある。環境や教育が、人間活動の範圍乃至方面を決定することは事實である。現在科學者たり法律家たるアメリカの青年も、これを一二世紀前に生れしめたならば、恐らくは教師、宣教師となつてゐたであらう。しかし、斯くの如き環境の力も、遺傳を變化することは出来ないものである。比較心理學の説くところによれば、一方面に卓越せる能力を有する者は、また、他の方面においても普通人以上の能力を示すものである。ダーウインをしてアメリカに生れしめたならば、生物學者としてのダーウインは現はれなかつたにしても、彼が單なる凡人として終つたとは斷ずるわけにはゆかない。恐らくは異つた方面に偉大なる業績を遺したことであらう、とパウ・ポペノーは説いてゐる。

このやうに人間には、信仰の力でも、教育の力でも、醫學の力でも、如何ともすることが出来ない遺傳の力が働いてゐるのである。だから、如何に宗教や教育によつて人間の改良を圖らうと骨折つても、到底不可能な場合があるのである。人間を改良しやうとするならば、宜しくまづこの點に留意してかゝらなければいけない。遺傳の力は、悪い方面に向つても強いと同じやうに、また善い方面に向つてもやはり絶對的に強いのである。だからこれを旨く利用しさえすれば、人間の改良は勞少くして多大の効果を納めることが出来るのである。遺傳の法則を無視して人間の改良を圖らうとしてもそれは徒勞であり、また人間の改良を圖らずして社會の改造を企ててもそれは到底十分なる目的を達することは出来ない。

以上、雙生兒の事例によつても、われ／＼は、よき社會に住むこと、即ちよき環境に處することも必要であり、またよき教育を受くことも勿論必要であるが、われ／＼がよき人間として生存することの、第一の要件は、よき人間として生れ出ることである。尤もわれ／＼は、現にこの世に生れ出て來てしまつてゐるもので、その遺傳素質を今から改良するといふわけには行かないが、しかしわれ／＼の子孫を、よく生みつけるといふことは、われ／＼の

心がけ一つで出来ることなのである。

四 劣弱者の保護を期する社会

遺傳の法則は、こゝに更めて説明するまでもなく、シレジアの博物學者グレゴル・メンデルによつて發見されたもので、今その法則を簡単に述べて見ると、こゝに純粹血統の黒のアンデルシヤンと、同じく純粹血統の白のアンデルシヤンと二種の鶏があるとして、その羽色の遺傳について觀察して見ると、次のやうになるのである。

一、黒と黒との子は黒

二、白と白との子は白

三、黒と白との子は青（混色）

これまでは至つて端的であるが、次に、

四、青と黒との雑種はどうかと思へば、黒でなければ青といふ風に、その何れか一方の色が出て来る。その数は大體約半分づゝである。そして、白い子供は一羽も生れ出て来な

い。それから、
 五、青と白とを番はして見ると、その子は矢張り青と黒との場合の如く、その子の半分は青で、他の半分は白である。次に、
 六、青と青とを番はして見ると、一寸考へると青の子ばかりが生れさうであるけれども、その實は青は半分しかなく、四分の一は黒く、残る四分の一は白といふ結果になるのである。

これを、数字の式のやうにわかり易く列記して見るならば、

1. 黒 × 黒 = 黒
2. 白 × 白 = 白
3. 黒 × 白 = 青(黒 + 白)……即混色
4. 青 × 黒 = $\frac{1}{2}$ 青 + $\frac{1}{2}$ 黒
5. 青 × 白 = $\frac{1}{2}$ 青 + $\frac{1}{2}$ 白
6. 青 × 青 = $\frac{1}{2}$ 青 + $\frac{1}{4}$ 黒 + $\frac{1}{4}$ 白

となるのである。

メンデルは、これを豌豆を材料として研究したのであるが、この法則はその後色々な學者によつて、動物植物のいろ／＼な方面から研究され調査されて、間違ひのないことを證明されたのである。では、人間はどうかと言へば、人間を動植と同様に取扱ふことは不可能なことであるから、人間の遺傳は、嚴密にメンデルの法則に支配されるものであるか否かを試験することは、一寸むづかしいことである。けれども、これまで多くの學者の研究したところによれば、大體においてメンデルの法則は人間の上にも作用するものであるといふ見解が生じて來てゐるのである。

ついでに、人間の遺傳について一寸注意して置きたいのは、人間の後天性といふものは、精神上のもので、又肉體上のもので、絶體に遺傳しないといふことである。それから一つ、これは前にも述べたが、環境の力は遺傳を變化させることは出來ないといふことである。この二つは、よく誤解され易いことであるから、はつきりと意識しておく必要がある。

この遺傳の法則を、人類の上に應用して、人類の改良を圖り併せて社會の改善を期さうと

して優生學を創始したのが、イギリスのサー・フランシス・ゴールトンなのである。ゴールトンは、彼の有名な進化論の創唱者ダーウインとは従弟の間柄であつて、夙に探検家として知られた人であるが、晩年には氣象學、實驗心理學等に多大の貢獻をし、また人類學に指紋法を移入して殊功を樹て、更に一九〇五年には、遺傳の立場から動物界における事實は、人類の間にも確實に期待されるといふ自信を以て、私財を投じてロンドン大學に研究部を設け、越えて一九一一年にその死に臨んで、その遺産の中から四十五萬圓を此の大學に寄附して、その研究に資せしめたのである。斯うして優生學は新科學として生れるに至つたのであつて此の研究所をゴールトンインスティテュートと云ひ、今は氏の高弟カール・ピアソンが所長となつて、不斷の研究を續けてゐる。

優生學は、改めて説明を加へるまでもなく、生物學を基礎として、これに社會學を消化せしめて成立つてゐるものである。ゴールトンは、それを定義して「優生學とは、將來の世代の種族的性質を心的ないし身的に改善し或は損傷する動因の研究である」と言つてゐるが、學問としての優生學の定義はもちろんこれで宜しい。しかし優生學の研究の目的は學問とし

ての研究を深めることよりも、その實際的應用に深い要求が潜んでゐるのである。そこでポペノーやジョンソンなどは、「應用優生學」といふ語を使用しはじめて、その應用方面の研究をはじめた。そして、この應用優生學を定義して曰く、「應用優生學とは、人類の來るべき世代の種族的性質を心的にも身的にも改善し、又は損傷するすべての方法——個人的にも、集合的にも現在行はれ、或は將來行はれんとする方法を包括するものである」といつてゐる。そして、この應用優生學の實際運動が、今日優生運動と稱せられてゐるのである。

優生運動には、積極的即ち建設的運動と、消極的即ち制限的運動との二方面がある。建設的運動の方面といへば、

- 一、優生者の結婚率を増加すること。
 - 二、これ等の結婚より充分なる出産率を得ること。
- 制限的運動の方面は、この反對に、
- 一、劣生者の結婚率を減少せしむること。
 - 二、これ等の結婚より生ずる出産率の減少を期すること。

の二つの問題である。

優生運動については、ダルトンがこれを創唱した當時から、種々なる誤解が含まれ、多くの人は、優生運動に對する無理解から、これを冷眼視したり嘲笑したりするといふことが多くあつた。今日でも可成り多くの反對者あり、攻撃者もあるが、その中には、相當の根據と信念とを以てする眞面目な人々もあるけれども、優生運動の何であるかを理解せず、反對してゐるものが多いように思はれる。大抵の人々は優生運動を以て牧者が乗馬を種取るように天才の種を取つて、これを繁殖せしめることであると考へてゐる。けれども優生學者は今日まで、決してかやうな提議をしたことはないのである。またさういふ試みを示したこともない。

劣生者、即ち缺陷者及び非社會的個人の將來における數を減少することは、優生運動者の希望ではあるが、餘りにこの點のみを力説する時は——また兎角この點のみを力説したがる傾向に陥り易いのであるが——反つて世の誤解を招致する場合が多い。しかしこの劣生者の數を減少せしめるといふことは、事實としては、優生學上さして重要な方面ではないので

ある。優生學の最も必要とし重要な事とする事は、かゝる消極的制限的方面よりも、優生者を増加することが急務なのである。故に、これまで多くの反對者が、捉へて以て反對の意を表明したる點は、優生運動者によりては、さして意にも介せなかつた點なのである。優生者を積極的に將來において増加せしめよことは、取りも直さず劣生者を將來において自然的に減少せしめることであるのは、何人も首肯することの出来るところである。

優生運動は、人間をありのままに見て、過去の經驗或ひは現在の理論が社會に最も價値ありと認めたるすべての典型を増加せしめよとするものである。單に數においてのみならずその能率において人類に貢獻する效力を増加せしめんとするものである。であるから優生運動は社會の目的が、最大多數の最大幸福、或は、更に、決定的に人類幸福の總和の増加を期するものであるといふことが出来る。優生運動は、つまるところ、身的及び心的缺陷者の生産率を減少して心的ないし身的優生者の出産率を増加することによつて、人類の水平線を高めようとする不斷の努力に外ならない。かゝる理想と原則に従ふ種族は永續し、且つ自然を征服し、環境を改善することか出来、その成員は幸福にして生産力に富むであらう。そして

かやうな目標の設定は決して單なる空想ではなくして、今日の進化論や他の科學の肯定し得るところであり、またこれに向つて實際運動として進むことが可能なのである。

優生學が期待するところは、

- 一、人口中の不良分子の種族的貢獻を減ずること。
- 二、人口中の優良分子の種族的貢獻を増加すること。

であることが、既に擧げた優生運動の積極的二方面の實際運動となつて現はれて來たのであるが、今日特にこの優生運動が、いはゆる文明國において盛になつて來たのはどういふわけであらう。一體人類世界なるものは、こんな優生運動といつたやうなものもがなくても、幾百萬年來人類を保持して來たものであつて、何等優生學的の保護改良がなくても、今日の状態にまで進歩して來たのではないか。それを今になつて優生運動などは笑止の至りであるといふ人もある。けれども、かういふ考へ方をするのは、人間をして、今日の状態にまで引つ張つて來たことに對して、最も力のあつたものは自然淘汰であつて、その自然淘汰が死亡率の相異によつて作用したことを注意しない人である。即ち不適者は死亡し、適者は生存した

のである。そして、社會のまだ幼稚な時代にあつては、人間は自然淘汰の作用に殆んど何等の妨害も抵抗も試みることが出来ず、自然のままに推移して、自然のままなる自然淘汰を實現せしめて来たのである。

ところが、人智が進み、文明が発達するに従つてだん／＼に自然に對する抵抗が甚だしくなつて来た。殊に十九世紀に入つてからは、それが著しくなつて来て、博愛精神の發達と醫學の進歩とは淘汰作用に干渉しはじめて来た。それが爲に、或る場合においては、人類における淘汰作用は殆んど停止し、又、多くの場合には、全然反對の傾向——即ち優生者よりも劣生者が生存するといふ奇怪なる現象をさへ生ずるようになつて来た。昔は、犯罪者は容赦なく處刑され、虚弱なる幼児は適當なる保護及び醫療の不足から、生後間もなく死亡し、狂者は慘酷なる取扱ひによつて死亡するか、少くとも絶望的不具者となり、人の親たるの機會が少なかつた。かういふことは、すべて苛酷であり残忍にも見えるが、人類の生殖原形質はこれがために清淨に保存されたのである。

ところが今日の状態はどうかといへば、無能者、放蕩者、心的及び肉體的、道德的不具者

は公費によりて保護せられてゐるのである。犯罪者は數年後においては、誓約によつて釋放せられ、一家の父たるの機會を與へられる。狂者は進歩せる醫術によりて、全治者として釋放せられ、再び社會の一員としての義務を開始する。精神虚弱者は苦心して養育せられ、これがために、反つて普通の兄弟姉妹は、その犠牲となつてゐるのを多く認めるのである。かうして數たへて見ると、慘酷なる自然淘汰の作用を受くべき性質のもの、即ち劣生者たる人類の不良階級が文明なるものゝ下に、博愛慈善の精神によりて、保護され老後まで完全に養育されてゐる。そしてその恐るべき生殖原形質もまた、これによりて次代に傳へられる機會が多くなつて来てゐる。

このことが、既に人爲的である以上、自然淘汰の下に自然に發達して来た人類生活も、他の一面において人爲的なる改善を期さなければならぬといふ必要が起つて来るのは自然なことである、これを常識的に考へると、この世の中の缺陷者即ち劣生者は、第三者の保護なしには生存することが出来ない。けれども、これ等の不幸者の保護を熱心に主張するところの博愛的精神なるものは、キリスト教文明の最高表彰の一と見なされてゐるが、事實は、多

くの場合において、極めて少数者のみに恩恵を與へて、多數者はそれが爲に犠牲となつてゐる。であるから現代は當面の幸福を追求するに急なるがために、苛重なる負擔を後代に科しつゝあるものといはなければならぬ。それであるから、優生學はこゝに個人的利益と、社會的利益との間に明確なる一線を劃することを要求するのである。優生學者は、不幸者に對する配慮において決して、人後に落ちるものではない。劣生者における幸福を擁護してやることは勿論必要なことである。けれども彼等に生殖の機會を與へ——事實において劣生者の多くは、最も生殖率が多い例を見る——それがためにその生兒をして更に自ら苦しませ、且また、彼等をして社會をのろはしめる必要はないのである。彼等の生殖を制限することは彼等の利益幸福を害ふことなしに、これをなし得られるのである。こゝが優生運動の以て實行し得る點なのである。

優生運動に對しては、可成りはげしい反對論もあつたのであるけれども、その反對論なるものには、可成りの誤解が伴つてをり、また、優生運動についての無理解も多かつたようである。けれども、優生學の以て立つところの信條と目的と及び人類生活における實際の状態

とを比較して考察する時は、何人も優生學存立の意義を肯定し得るであらう。なほ優生運動の以て行はれざるべからざる所以は、他の章を相参照していただきたい。

五 理想的な結婚

以上で優生運動の實際は大體説いた積であるが、つまり、優生學の基礎となるものは遺傳ではあるが、應用優生學の取扱ふ根本問題は、結婚そのものである。優生學とは何であるかと言へば、一口にこれを言ふならば、如何にして最もよき子女を生ますべきかといふことを研究すると同時に、最もよき子女を生ませるやうに、社會人類にその方法を普及せしめることである。

遺傳の力を知つたならば、そして、自分の子孫、自分の家、自分の國家を大事に思ふ者なら、血統といふものを無視した輕卒な結婚をしてはならないといふことも強く自覺せねばならぬ筈である。一時の感情や、虚榮や、金錢に囚はれた無謀な結婚をしてはならないことを切實に感じなければならぬところである。では、如何なる結婚が理想的な結婚であらうか。

結婚は人種により、土地により、區別して考慮しなければならぬ問題である。日本人には日本人の結婚法があり、結婚年齢があり、日本人の結婚生活がある。故にヨーロッパ人のなす結婚方法をそのまま日本人に應用することは出来ない。結婚年齢にしても、體質その他の相違から、日本人とヨーロッパ人とは一律に行かない事は明らかである。であるから、同じ優生學であつても、日本においては日本人を對象とする獨特の優生學が創始されねばならず、その應用方面においても、独自の應用優生學が發達しなければならぬ。

結婚すべき男女の年齢。

結婚するにあつて、その配偶者を選択するには、遺傳學的に遺傳素質の純潔なるものを探るべきことは、既に述べたことによつて、大體諒解されることと思ふ。それならば、男女はその結婚の時期として、何歳位の時が宜しいかといへば、それはその人によつて差異のあることであつて、一般の定則年齢といふものは決つてゐない。けれども、大體において、女子は滿二十歳位、男子は滿二十五歳位が最も適當な年齢である。日本人の結婚においては、よく年廻りとか厄年とかいふやうな事をいつて、合性だの星まはりだの何のかんのとやかまし

いことをいふけれども、斯様なことは全く問題とならないことであるから、そんなことに氣をとめずに、結婚年齢として適當なる男子二十五歳前後、女子二十歳といふことを標準としてこの時期を逸せぬやうにしたいものである。

夫婦の年齢の差。

男女の年齢は、どの位の差があればよいかといふことは、誰も一度は考へて見る問題であるが、これも理屈通りには行かないけれども、五六歳の差が最も適當であつて、言ふまでもなく男の方が女よりも年長であるべきである。結婚生活が永續し、夫婦心身の調和が保たれよき子女を生むといふことを目的とするにおいては、どうしても五六歳の差を標準とするのが最も圓滿のやうである。年齢の差の甚だしいのは、一時的には火のやうな戀愛を感じるやうなこともあるであらうが、永續性に乏しいのが通例であり、また、その間に生ずる子女の心身の健康及びその生ひ立ちにおいては、とかく順當なる發達を見ないことが多いがちのものであることを記憶すべきである。

文明が進むと共に、中流以上の人々が結婚期がだん／＼遅れてゆく傾向があつて、早婚と

いふことがなくなりつゝあるのであるが、それでも下層民や邊鄙な田舎の百姓などの間には可成り早婚を敢てしてゐるものが少くない。早婚の弊害あることは今更こゝに説明するまでもないことで、醫學上、遺傳學上よくこれを證明することが出来る。早婚は夫婦の間に来る子女が優良であり得ないばかりでなく、その早婚當事者たる夫婦もまた、その體格體質の不完全なところから、心身を過勞してその健康を害し「心身の發育を不充分ならしめるおそれがある。早婚も弊害あるが、晩婚もまた不幸をもたらし易いものである。晩婚は男女ともに世間の荒浪にもまれて、心身ともに個性的にかたまつてゐて、なか／＼溶け合ふことがなくなつてゐる。男子は不規律なる性慾生活を経験して來てゐるに相違なく、女子は貞操が保持されて來てゐるとすれば、永き獨身生活のために、性慾に變調を帯びて來てゐるに相違ない。斯かる者同士の結婚は、その生活において理性的調和がうまく行かず、感情的行き違ひもあり、なか／＼容易に圓滿を期し難いものがあるに相違ない。なほまたその出産に際しては、とかく難産にかゝり易いものが多く、出産してもその發育および教育において、不完全なことが多いものである。故に早婚をいましめるやうに、晩婚もまたこれを避けるやうにす

る必要がある。

青年男女は、結婚年齢に達したならば、なるべく早く結婚してしまふ方がよいのであつてこの意味からは、優生學者は常に早婚（男子二十五歳女子二十歳位）を勧めるものである。それならば、その結婚にあつて、如何なる人を配偶者として選ぶべきかと言へば、既にいつた通り、血統の正しい、悪い遺傳素質の傳はつてゐない、健康な人を選ぶべきである。世の中には、意氣に感じたり、同情の爲にかられたり、財産や名譽に目をくれたりして、随分と無理無謀な結婚をする人も少なくないが、さういふことはこれからは力めて避けなければならぬ。

よき健康體な人を配偶者として欲しいことは言ふまでもない。また、よき遺傳をもつてゐる人を欲しいとなるのも、理の當然である。それならば一體、どんなものが遺傳的なものであつて、どんな遺傳をもつてゐる人々とは結婚を避くべきかであるかと言へば、普通一般に知られてゐるやうなものから列擧すれば、大體次のやうなものである。

結核

癩病
精神病(瘋癲)
精神虛弱
微毒
痛
アルコール中毒
腦溢血
癲癩
聾啞
色盲
近視
白內障
黒内障

血友病
糖尿症
尿崩症
畸形
獨子
短命

右の様なもの、結婚するにあつて注意せねばならぬものである。結核とか、癩病とか、微毒とか言つたやうなものは、これを隠密に言へば、病氣そのもの即ち、病菌そのものは決して遺傳するものではない。それが遺傳するやうに見えるのは、病氣そのものが遺傳するのではなく、それはその病氣にかゝり易いといふ素質が遺傳するのである。だから、よくそれに注意すれば、その豫防がなし得られないといふことはない。けれども、萬全を期するためには、その結婚を避くる方が賢明であることは言ふまでもない。とにかく、悪い遺傳素質を持つてゐるものを配偶者として選ぶことは、これを避けるやうにしなければならぬ。上に

列挙したものは、すべて配偶者として資格がないものだといふ意味ではなく、遺傳傾向のあるものだといふことを示して、配偶者選擇の参考に資したものである。近頃の如きはこれを左まで気にしない人が多いようであつて、平氣で結婚するやうであるが、理想から言へば、完全な視力をもつた人が配偶者であればよいことは言ふまでもない。かういふ立場から遺傳的傾向の著しいものを指示したのである。

次に、結婚の方法について、例へば感情結婚（主として歐米諸國に多き戀愛結婚）や、理性結婚（主として我國に多く行はれてゐるやうな父兄縁戚などの選擇に由る結婚）などについて一應述べたいのであるが、限られた紙數では到底盡されないから、この位にして置きますが、要は優生學的覺醒のもとに、つまり遺傳學的自覺を以て結婚せねばならぬのであります。

六 天才よりも普通の人

あの男は優生學的だとか、あの人は非優生學的だとかいふ言葉が、近頃日常の茶話などに

もよく出るやうになつたが、この優生學的といふことに對して、大抵の人は誤つた觀念を持つてゐるやうである。自惚れとカサ氣のない者はないとか下世話で言ふ通り、誰でもみな相當の自惚れを——よく言へば自負心を持つてゐるものであるが、をかしたことに優生學の前に出ると、餘程の自惚れの強い負け嫌ひな人でも急に小さくなつて、「私は非優生學的でありまして」などと温順に謙遜して了ふのである。何故そんなに謙遜的になるかと質して見ると、大抵は酒が好きだとか、煙草を喫するとかに因るのである。つまり、酒を飲み煙草を好くから優生學的でないとか考へてゐるのである。これは飛んでもない考へ違ひであつて、なるほど理想としては酒も煙草も攝らないに越したことはないが、しかし、程度を超さないほどの酒飲なら問題ではないのである。文明に浴し、文化生活を送る現代人は、相當の享樂を取るのが當然であるから、好きであるのなら適度の飲酒や、喫煙は左程の問題ではないのである。

これと同じやうな誤解から、優生運動とは、天才や秀才のみを多く作るための運動であるかのやうに考へてゐるものが随分多い。勿論、文明の進歩には、天才の才能努力に俟つとこ

ろが多いものであるから、天才の出現は人類社會にとりて望ましいことではある。けれども優生學の最も期待するところは、天才階級の出現ではなくて、天才を生み出し得る素質をもつた中間階級の嚴存なのである。であるから、優生學のいはゆる優生階級なるものは、決して第一流の天才階級そのものを指すものではないのである。と同時に、個人に就いても、あの男が優生學的であるとかいふことは、必ずしも頭腦のすば抜けて明敏な、身體壯健な、どこからどこまで人並以上の天才的な人を指すのではなくて、悪い遺傳素質を持つて居ず、頭も普通であり體格も十人並であり、社會の生存競争に伍して行けるやうな者なら、すべて優生學的な人間なのである。この點は注意しておく必要がある。

しからは、何故に此の第一流の天才階級にそれほどの重要味を感じぬかと言へば、天才はこれを花に例へて見れば、八重咲きのものなのである。八重咲きの花の中でも、最もよくバラの花に似てゐる。普通一重の大輪が中間階級の花であるならば、八重の花はその中から生れた天才である。八重の花はなるほど美しくもあり、花の誇りでもある。けれども、八重の花は、人間の天才と同じやうに、優れた美眞を持つてゐるが、一面にはまた甚だしい缺點もあ

る。八重のバラはこれそのまゝ放任して置けば、また二代目の八重の花を開くこともあるが片輪ものが出る場合が多く、大抵は先祖返りをしてしまつて、八重の美を失つてしまふ。人間の天才も同様で、たまにはよい子を生む事もあるが、大抵は凡くらか、さもなければ普通の人間である。天才の子孫を自然のまゝの競争に一任しておく時は、或は力を失つたり、或は原人状態に復歸する傾向がある。故に天才は、それ自身としては、人類文明に貢獻するところが多いけれども、優生學的にこれを見れば、さほど重要視するに足らないのである。

優生學の期待するところは、人類社會の要求する、かうした天才を多く生み出し得る階級即ち優生學的意味における優生階級をどこまでも榮存させて行きたいといふのである。さうすれば、常にこの世から健全性が失はれないし、同時にまた天才も現はれて来る。天才は劣性階級の中からは、現はれて來てゐないことは、これまで多くの學者が、遺傳と系統との研究によつて明らかに來てゐるところである。そこで、中間階級なるものが人類に貢獻する所甚だ大なる使命をもつてゐるものであるといふことがわかるのである。

英雄とか天才とかいふものに對して、世人はよく、あのやうな偉い人を配偶者に持つた人

はどんなに幸福だらうなどと、結婚の條件として素晴らしいもののやうに考へるけれども、右のやうなわけで、婚姻の條件としては天才とか才智とかいふものは、決して重要なものとはならないのである。それは、單に子孫のためばかりではなく、その夫婦の現在の生活のためにも、多くは不幸なものである。何故かといへば、所謂天才なるものは、世間的には高名でもあり、一見、人間の虚榮心にとりては花々しくも見えるけれども、その家庭における私的生活なるものは我儘な、放縱な、片よつた、非常識的なものである場合が多いのである。天才の家庭生活を研究して見ると、大抵は所謂不幸なものが多いのである。天才を配偶として選ぶことは、普通人にとりては苦痛の重荷を加へるばかりである。但し、さうした天才の變つた點を好むといふ一種變つた性質をもつた人、即ち、ある意味の天才者ならば、敢て差支へはないわけである。けれども、これは優生學の意味と言つてゐるのでないことを斷つて置く。

社會學者の言ふところによると、生殖は、大抵中間階級の人々によつて營まれてゐるといふことであるが、これは、優生學者の究めてゐるところと相一致するものである。中間階級を

挾んでゐる二つの極端階級は、生物界における人間生活の中心を構成することにどれだけの意味があるかは考慮すべき問題である。嘗てマルクスは、その唯物史觀説の立場から、また人口論の立場から、中等社會の滅亡が遠くないことを豫言したけれども、それは、推理上の論斷に過ぎない。生物生存の原則は、常に極端階級が枯れて、標準型の中間階級が残るのである。即ち、生物の生存といふことは、生殖に外ならないのであつて、生殖は標準型の階級によつてなされるものである。

これだけ述べると、いはゆる優生階級なるものの標準が、おぼろげながら了解出来るやうに思はれる。優生階級の人類社會に必要だといふことと、そして、如何に中間階級を保護せねばならぬことの大切であるかは、この意味からわかるのである。そして、これによつて優生學者は、決して特殊階級に對する特別の處置をとらうとするものでないといふことも、わかることと思ふ。

そこで、このやうな見地から、結婚といふものを考へて見ると、社會への見えのために、地位とか、名譽とか、高名とかを得んがために、戀愛を犠牲にし、持參金づきなどで、天才と

結婚するなどといふことは、——さういふ例は小説や芝居にばかりでなく、實世間によくある話であるが、これは本人同志のためばかりでなく、社會のためにもならないことである。この點から見ると、結婚といふものに、二様の型式が出来るわけである。即ち、その一は、人類同胞のために配偶者を選ぶことであり、その二は、展覽のために配偶者を選ぶのである。そして、その後者の展覽のために配偶者を選ぶといふことは、優生學上から見るともなく、一般社會人士のこれをとらざることであることは言ふまでもない。

X X X X X

要するに優生學とは、生物學を基礎とし、社會學を上層として成り立つてゐるものであつて、これは單なる學問として研究を深めることよりも、その實際的應用に深い要求と意義とが潜んでゐるのである。つまり、應用優生學即優生運動として實行され榮えることに本旨があるのである。

そして、その優生運動とは、一方においては、

結婚と

社會醫學と

修繕醫學の三つの方法によつて人間の改良を圖り（つまりよい種子を作り）、同時に一方では教育方法（よい手入れ）や、諸種の不備不完な制度（よい畑）の改善に力めて一層それを効果的ならしめ、次第に斯くして社會の改善を圖り、國家の隆盛を期して、幸福繁榮なる生活を送ることの出来るやうにするのである。だからこれを大局から見れば、その企ての偉大なることは、まことに世界改造の大運動なのである。であるから、宗教とか慈善とか政治とか、さういふ方面から社會の改善を企てた者が多くあるけれども、積極的なる事實の上に立つ眞面目なる理想にして、かくの如く偉大なるものは、まづ／＼その前例がないと言つて宜しい。これは決して空想でもなければ夢想でもなく、眞面目なる學理の上に立つ理想なのである。そして、この運動の中でも特に重要なのは、肝腎の子供を生むところの婦人と、その子供を育てあげるところの教育者であるから、將來とくにこの兩者の大いなる自覺を俟たなければならぬのである。

よい種子

よい畑
よい手入れ
この三拍子をそろへることに努力するのである。

了

入會規定

▼體裁——四六版布製一冊紙數約七十頁、九ポ
イント組ルビ附。

▼刊行期日——毎月三冊(三回に)配本。

▼申込方法——申込と同時に會費(何ヶ月分
も)振替貯金東京六八二八六番に御拂込になつ
た方を會員として名簿に登録します。

▼會費——一ヶ月(三冊)金五十錢。三ヶ月分
(九冊)金壹圓五拾錢。六ヶ月分(十八冊)金貳圓
八拾錢。一ヶ年分卅六冊金五圓五拾錢。可成三
ヶ月以上御拂込願ひます。

▼送本料——會費の外に送本料(一ヶ月三冊分
金六錢)申受けます。

本叢書 1、每冊の題目は現代人の知らねば
ならぬものばかり 2、執筆者は現
代一流の専門家を網羅す 3、記述
の特色 4、記述
平明而かも最も精確なる知識が得
られる専門的知見の泉! 高等常識の糧!
5、定價至廉無比、一
家庭圖書館が建設される 5、定價至廉無比、一
月五拾錢で三冊の本が得られる。

昭和四年九月二十一日印刷
昭和四年九月二十四日發行

現代生活叢書 (八月配本)
第十二輯 優生運動

著者 池田 林 儀

發行者 曾根 松太郎
梅津 和 市郎

印刷者 廣瀬 憲 六
東京市芝區南佐久間町二ノ六番地

發行所 東京市神田區一ツ橋
帝國教育會出版部

電話九段(33)三四五番 三六三七番
振替東京六八二八六番

『現代生活叢書』 第一期刊行書目

第一年度分

勅語と詔書 文學博士 林博太郎先生
 婦人の雄辯 伯大講師 原田實先生
 新時代の雄辯 早大講師 清瀬一郎先生
 讀教と書 日比谷圖書館長 慈海先生
 宗學の早分り 文學博士 高島米峰先生
 哲學の早分り 文學博士 紀平正美先生
 神學の早分り 文學博士 山本信哉先生
 政黨の早分り 文學博士 馬場恒吾先生
 陪審の早分り 法學博士 山内隆三先生
 犯罪と指紋の早分り 法學博士 吉川澄一先生
 人口食糧問題 農學博士 那須皓先生
 農村の早分り 農學博士 山崎延吉先生
 貸借の常識 代議士 太田正孝先生
 租税の常識 代議士 阿部賢一先生
 アメリカの常識 代議士 鶴見祐輔先生
 滿洲のソート・ロ 文學博士 秋田雨雀先生
 最近のソート・ロ 文學博士 高野辰之先生

現代映畫の聽方 文學博士 橘高廣先生
 西洋音樂の神祕 文學博士 田邊尚雄先生
 山の油と味 農學博士 横野有恒先生
 醬油の味 農學博士 黒野勘六先生
 鶏乳の卵 農學博士 衣川義雄先生
 牛乳の料理 陸軍少將 澤村眞先生
 馬鈴薯と料理 農學博士 石川潔太先生
 藥草の料理 農學博士 河村政善先生
 人絹(レリヨン)の料理 農學博士 西田博一先生
 産業組合の熱話 農學博士 有働良夫先生
 照明と電熱 農學博士 青柳榮司先生
 電送寫真と熱話 農學博士 岸井壽郎先生
 スカイサイフォン 農學博士 市川源三先生
 結婚の運動 農學博士 池田林儀先生
 優生の健康法 農學博士 正木不如丘先生
 いろ／＼の健康法 農學博士 吉田章信先生
 スポーツの健康法 農學博士 二本謙三先生
 完全栄養と食主義 農學博士 山本久榮先生
 手軽に出来る美容法 農學博士 山本久榮先生

終

